

## 高校生・大学生のためのグローバルキャリア入門

### Chapter12 国際公務員への道：それぞれの体験談1

本章では、国際公務員等に関心がある方への参考に、どんなキャリアをへて国際公務員になったのか？ 生の声を紹介しましょう。まず国連ボランティア計画にお勤めのNSさん、そして関西学院大学の教員で国連開発計画（UNDP）出身の村田俊一先生とアジア開発銀行（ADB）出身の小西尚実先生からお話をうかがいます。

#### 国連ボランティア計画（UNV）東京事務所駐在調整官 NS さんとのQ & A

**Q：ご自身の略歴を教えてください。**

A：米国オハイオ大学大学院文理学部政治学科を修了後、愛知県の私立大学にて事務職員として留学生の生活支援業務に携わりました。2001年1月より国連ボランティアとして、東ティモール独立のための住民登録、選挙支援活動を担当し、2002年10月より国連開発計画サモア事務所にてUNVプログラムオフィサーとしてサモア、クック諸島、ニウエ、トケラウの4カ国のUNVの活動全般の運営・管理に携わってきました。2005年8月より「ほっとけない世界のまずしさ」事務局にて事務局長補佐、事務局長代理を歴任し、2007年4月より、国連ボランティア計画東京事務所に勤務しています。

**Q：どのようなきっかけで、国連で働くことになったのですか？**

A：国際政治の勉強をしていたので、国連の活動については知っていましたが、自分が国連で働くことになるとは思っていませんでした。大学職員の契約が打ち切られることになり、東ティモールでの**国連ボランティアの募集に応募**し、合格したのが国連で働くことになったきっかけです。これ以外の求人にも応募しましたが、最も熱意を持って面接での質問に答えることができたのが、UNVの面接でした。

**Q：国連での仕事について教えてください。どのような業務を担当していますか？ 中でも、大変なことは何ですか？ また、おもしろいことは何ですか？**

A：UNVの関西学院大学様を含む日本のパートナーの方々との関係維持と発展のための日々のコミュニケーション、日本でのUNVに関する広報活動、そして邦人国連ボランティアの方々の送り出し業務等、UNVに関する日本国内業務全般を担当しています。

国内におけるUNVの露出については私の活動内容が直接反映するところですので、とても責任とプレッシャーを感じます。活動のためのリソースがほとんどないことも大変です。

稀少な資源の中で、いかにUNVをより知ってもらい、リソースを獲得していくか。まだまだやれることはたくさんあると思っているので、それを日々実行に移していくこと。そしてUNV全体としての新しい方向性（「開発のためのボランティアリズム」）について多くの方々に理解をいただき、支援していただくための地道な活動を継続させていくことに難しさを感じる反面、面白さややりがいも感じています。

**Q：これから国連をめざす人に、メッセージはありますか？**

A：関西学院大学の先生、職員、学生の皆様のボランティアに対する理解の深さ、そして、行動力にはいつも感謝しております。今後とも引き続きボランティアリズム並びに国際協力に対するご理解、ご協力をお願いしたいです。このことが、この業界で働くための根底にあるべきだと考えていますし、これがなければ、国連で意味のある仕事ができるとは思いません。

（『学生達は国境を越える～国連情報技術サービス(UNITeS)の挑戦～』から）

#### 国連職員への道（村田俊一先生：関西学院大学総合政策学部）

##### アメリカの大学院に留学して

アメリカでの授業が始まると、聞きしに勝る授業内容とそのレベルの高さは想像をはるかに超えていました。米国大学院大学の院生の意気込み、勉学の深さ、情熱に圧倒される毎日でした。自分の実力不足にがっかりし、情けない日々がつづきましたが、クラスメートの米国人、ギリシャ人に勉強の方法を教えてもらったことで、いまの私があるといっても過言ではないでしょう。

政策科学の必須コース“Scope and Method”のクラスで初めの小テストは“F”（Failure）で、本当にシ

ヨックでした。これは担当教授の Teaching 戦略らしく、クラスの半部分が“F”だったようです。最初のテストはカウントしないということで、危機を脱出しました。毎日、夜中まで図書館で勉強して、帰宅が午前2~3時はざら、それでもようやく皆についていくことができたのは先に述べた2人の友人たちのお陰です。復習するために、毎日、タイプライターでノートを整理しました(この時代、ノートパソコン・ワープロはありません)。ここで、理論の立て方、仮説の立て方を徹底的に学習しましたが、定量化がかなり進んだ1980年代の米国定量政治経済学は日本とは違い、統計学との融合が新鮮でした。

しかし、自分の英語能力では中途半端でしか討論に参加ができない。そのもどかしは筆舌に表せないほど辛かったし、悔しいものでした。帰国するに帰国できない。背水の陣で臨んだ学問とは、米国生活とは、なんと自分自身をここまでコーナーに追いつめてくれるものか、と。実力主義で、甘えが通用しない社会を経験しました。親や友人のありがたみも身に染みました。

## 国連職員への道

だんだん学問の楽しさと米国生活にも慣れてきて、軌道に乗り始めた頃、博士課程への推薦を教授陣からいただきました。この時期、大学院選抜の国連へのインターンに合格しましたが、自分が何を求めているのかははっきりしていませんでした。体裁や恰好や、ブランドで振り回されている自分がそこに存在しました。

無責任な同輩たちは、「30代で億万長者になり、退職してハワイでゴルフショップでも経営すればいいではないか。何を迷っているのか」と。それでも、人に直接役に立つ仕事がしたい。いままで批判してきた国連の職業が再度浮上してきたのです。遠い存在の国連本部の**大学院生選抜インターン**の試験を受け、採用課へ配属されました。そこで人事や予算の業務を通して国連の“動”を実感しました。

## 自己の潜在能力を見出す現場経験

再び大学院で学んでいる時、国連開発計画（UNDP）本部と日本政府国連代表部から「あなたはUNDPに向いているようだから**JPO-Junior Professional Officer**の試験を受けてみないか」と言われ、受験しました。試験は2時間筆記、そして2時間の口頭面接でした。実に難しいものでした。

2週間後、UNDP採用官から電話連絡があり、「おめでとうUNDP-JPOに合格しました」。そして、「どの国に興味がありますか?」という質問に「人が住んでいれどどこでも行きます」と即答。採用官は笑みを浮かべながら、「2か月以内にウガンダ、カンバラ事務所へ赴任してください」。

「アフリカか。専門でもないし。いいのかな」。多少不安はありましたが、自分の第六感に響くものを感じました。Wall Streetでもなく研究者でもなく。国連職員??! 2年契約だからそれが終わる時期に、将来のことはまた考えることにしました。1981年11月3日にウガンダに赴任したのですが、手荷物は何かスイスのチューリッヒに行ってしまう、到着したエンデバ空港には、UNDPの運転手は迎えに来てはいませんでした。着の身着のままの格好で、バナナのトラックにヒッチハイクして、UNDPカンバラ事務所に到着しました。

チャレンジングな開発援助の経験が始まろうとしていました。これまで学んできた政治経済やリサーチデザインの知識は、ここで通用するのだろうか? 不安だらけでした。赴任前の準備期間、アフリカのことはUNDPアフリカ局の専門職員から説明は受けたのですが、みんなが、それは「島流し」みたいなもので、「何か悪いことしたのか?」と強烈な嫌味を言われました。開発エリートはアジア局というのが、一般的な評価でしたが、それよりも何よりも、日本人として、アフリカに行き一旗揚げようと思う気持ちのほうが強かったようです。怖くも、心配もしていませんでした。このアフリカの実践経験は、私を大いに進化させる礎となるのです。

カンバラ事務所は猫の手も借りんばかりの忙しさで、待っていましたとばかり大小あわせて30以上のプロジェクト、財務管理をその日から受け持ちました。国連英語は甚だ難しく、仕事の内容が把握できない。公式文書の書き方がわからないので、同僚から助けてもらいながら必死になって、仕事をしました。またもや挫折か。

そう考えている時、国連の入っている建物の真向かいにあるTEXACOのガソリンスタンドが反乱軍に爆破され、かなり長い間反乱軍（北部の部族で構成され旧アミン政権を支えたグループ）と政府軍（タンザニアの軍事支援をもとにアミン政権を更迭したオボテ政権）との銃撃戦が続きました。インド総領事館もが襲撃されました。しかし、ボスや同僚たちは淡々仕事をしているのです。彼らの冷静さには驚きました。しばらくして、次席代表より反乱軍の地域への出張に行くように指示されました。反乱軍の拠点はウガンダ北部カラモジャ地方で、遊牧民の生活をしながらゲリラ活動をしていました。女性、子ども、老人たちは農耕に従事し、男性たちが遊牧するという生活ですが、家畜争奪の争いが内乱につながる状況を目撃します。彼らと生活すること数週間、頸動脈を切って、流れる血とミルクを混ぜて飲む習慣には、なかなか慣れませんでした。部族長に気に入られ、「娘と結婚しないか」と言われた時は、ひっくり返りそうになりました。



ウガンダにて

出張後、初めてマラリアにかかり、40度の高熱は一週間ほど続きました。「俺は、ここで果てるのか」、なんともいえないほど、心細い日々でした。激動の人生を歩み続け、しかし**開発援助**の世界に魅せられるものは、なんとと言っても現地で仲間と受益者と一緒に作り上げていく**プロジェクト**の醍醐味、それに尽きるでしょう。歩きながら考え、立ち止まっては悩み、またそれから歩み出す。「嫌いならとっくにこの世界から出て行っているだろうに。やはり、これが天職か」。なにやら、この世界に魅せられる自分を感じていました。

「俺たちには明日がない?!」・・・人間は追い込まれるとなんでもするし、通常の倫理観からは想像もできないような殺戮行為もする。そのような社会にどっぷりつかって、粗雑で非文化的になっていく自分と、安定した生活がしたい自分とが混在していました。2年のウガンダ生活は、20年くらいに匹敵する経験と知識を得たようでした。（「開発援助の現場から」より一部を抜粋・改編）



ブータンにて

## 国際機関へのキャリアパス（小西尚実先生：関西学院大学総合政策学部）

### 自己探求時期の20代～ダブルマスター（二つの修士号）という選択～

大学卒業後、社会科学の分野でより深いリサーチスキルを習得したいと思い、京都大学大学院に進学しました。自分にしかできないことを模索し、少しずつ世界への関心を高めていった時期です。

その折、転機が訪れました。指導教員が海外留学を後押ししてくれたのです。大学院を休学し、イギリスの**ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス**（ロンドン大学経済大学院、以下、LSEと記載）に留学が実現しました。留学先を決定する際には、日本では学べないような研究領域やプログラムを世界最高の研究者のもとで学びたいという強い思いから、LSEの**人的資源管理論**とその関連分野がある修士プログラムに応募しました。

私が学んだ人的資源管理論は、日本では実務色が強く、学術的に学べるプログラムを提供する大学は国内にはまだありませんでした。京都大学大学院を退学せずに、休学したまま留学した理由は、双方の大学院を修了することで知識の幅を広げ、ダブルマスターで自分に更なる付加価値をつけたいと考えたからです。

LSEの同級生は、大学卒業後にストレートで大学院に進学した者は少数派でした。その多くは、世界的にも有名な企業の人事マネージャーやトレーナー、各国政府機関の人材開発政策に携わるプロフェッショナルなど、第一線で活躍している社会人たちでした。このような様々な経験を積んだメンバーが一堂に会し、グループワークやケーススタディー分析で、刺激的なディスカッションが連日、繰り広げられていました。

それまで日本で受けた教育とは違う世界に圧倒される日々でした。1年間で修士論文の執筆と、全てのコースワークの授業に合格しなければなりません。同級生の中には修士号を取得できず、帰国を余儀なくされた者もいました。「絶対に修士号を取らなければ、日本に戻れない!」と、まさしく死に物狂いの1年間となりました。

第一線で働いた経験のある多様なバックグラウンドを持った、価値観の違う同級生と関わる中で、私自身の将来ビジョンが少しずつクリアになるのが分かりました。世界という視点からキャリアを考え、日々繰り広げられる真剣なグローバル・キャリア談議に、思考が洗練されていったのです。同級生の中には、国際機関でのキャリアを志望する者もあり、私も刺激を受け、「国際機関で働く」という職業への「憧れ」から「リアルな目標」として自分の中で鮮明になっていきました。

### グローバル・キャリアの扉開く～初めての国連～

LSEの修士号を無事に取得後、京都大学大学院に復学しましたが、イギリスで経験したグローバルな環境が頭から離れず、国際機関でインターンシップに参加したいとの思いが募り、さらなる休学を申し出ました。

「国際機関で働きたい」という強い気持ちを抑えきれず、その可能性を模索しました。思い切って外務省に問い合わせの電話をしましたが、国連のインターンシップなどは把握していないと冷たくあしらわれたこともありましたが、しかし、国際機関で働きたいという思いは強くなるばかり。諦めずに考え抜き、一つの方法を思いついたのです。自分のCV（Curriculum Vitaeの略で履歴書のこと）や、自分にはどのようなスキルがあり、どのような貢献ができるのか、自分をアピールする文書を英文タイプで作成し、エアメールで海外の主な国際機関の人事部人事課長宛てに直接送ったのです。その努力の甲斐があってか、約1ヵ月後、突然フランスのパリに本部のある国連**UNESCO** 人事部教育訓練課からファックスで、**インターン**として働かないかというオファーでした。パリから届いたこの一通のファックスが、熱望した国際的なキャリアの扉を開けてくれたのです。

突然のオファーであった上、仕事開始日まで2週間を切っていたため、ひとまずスーツケース一つを持ってパリに飛びました。もちろん住まいは決まっておらず・・・。英語ができれば、現地に着いてから何とかできるだろうと甘く考えていましたが、早々に苦戦することになります。というのも、当時のフランスでは日常生活では英語がほとんど通じず、フランス語が求められました。UNESCOの上司や同僚の助けを借り、少しずつ生活環境



を整えました。新たな生活環境の中でトライ＆エラーを重ねて、環境適応力の大切さを学びました。

同時に、仕事も始まりました。UNESCO 本部内での文書やコミュニケーションで使用される言語は、英語ではなくフランス語でした。フランス語が未熟な私にとっては、生まれて初めての国際的な職場で、慣れない仕事と同時にフランス語の向上にもがき苦しみました。言語は、単なるコミュニケーションの“ツール”などと言われます。しかし、プロフェッショナルとして働く上で、人との信頼関係を築く基盤となる言語の習得は、国際キャリアを考えた時に必須であると身をもって痛感しました。

国連 UNESCO パリ本部では、様々な仕事に携わりました。UNESCO 加盟国である途上国の政府代表団がパリ本部で受ける研修プログラムの企画立案のマニュアル作りや、教育訓練のニーズ分析、評価などです。今ではほとんどの国際機関でインターンシップが実施されていますが、日本でよく見られるお客様扱いのインターンシップとは違い、国際機関で働くインターンには、求める人材の要件や職務内容が明確に提示され、限られた期間内に質の高いアウトプット（成果）を出すことが求められます。国際機関のインターンシップは、学生の間に、国際舞台で自身の力を試すことができる貴重な機会なのです。

UNESCO パリ本部での3カ月のインターンシップの後、そのパフォーマンスを認められ、さらに3カ月間専門的業務を遂行するコンサルタント契約を結ぶことができました。この UNESCO でのトータル半年間の経験が礎となり、20代半ばに私のキャリアの方向性が決まったのです。

パリから帰国後、無事に京都大学大学院を修了しました。国内で就職することはせず、その後、国連 ILO ジュネーブ本部人事局で半年間コンサルタントとして働く機会を得られ、ジュネーブに飛びました。思い返せば、日本と海外を行ったり来たりと、試行錯誤の20代でした。短期間で自分の CV やカバーレターをアップデートして送付し、契約を結び、旅の準備や現地の住まいの手配など、この時期に段取りよく物事を進めていく力が鍛えられた気がします。英語での履歴書やカバーレターを作成する文書能力、自分をアピールする表現力や発信力、さらに交渉力など、手探りながらもグローバルな職場で生きて抜く力を実践で養っていくことができました。

### あえて“遠回り”を選択～日本への帰国～

20代に2カ所の国際機関で職務経験を得たことで、「国際機関で働きたい」という思いが、自分の中でより強くなりました。将来、国際機関でプロフェッショナルとして働く時に、どのような強みが持てるのか、どのようなスキルや経験を持っておくのが有利かを冷静に考えた時、まずは、日本の民間企業で働き、日本企業の良い点、悪い点を経験し、自身の幅を広げておくことは、国際機関で働くためにも必要と考え、日本に戻りました。

外資系企業に入社し、人事採用担当者として新卒の採用計画立案、採用プロセスの企画、実施におけるチームリーダーとして主務を担当しました。その企業では初めての女性人事担当者でしたが、自分としては最大の努力をして成果を上げ、年間のハイパーフォーマーに送られる社長賞を受賞することもできました。会社への貢献は果たしたと自負しています。

民間企業で働く間も、いずれ国際機関でキャリアを築きたいという目標は常に意識していました。そのため、特にビジネス英語のライティングスキルや時事英語のリーディング、スピーキングスキルなどの向上には時間を割きました。さらに国際機関の人事局に自分の CV やカバーレターを送り続けました。海外の職場環境では、**仕事のオファーが突然くる**ことも多く、そのチャンスを受ける敏速な対応が求められます。チャンスへのアンテナを張ると同時に、そのチャンスを得られるために最大限の準備をすることを同時に進めることが重要です。常に最新の世界のキャリア情報を収集することは大変でしたが、その先のキャリアの可能性を考えるとむしろ心が躍るようにわくわくし、モチベーションを高く保つことができました。

民間企業で3年目を迎えたとき、突然、フィリピンのマニラに本部のあるアジア開発銀行（ADB）人事局から一通のメールが届きました。採用選考への招待です。その後、正式なオファーを手にした時には、ようやく自分が志していたグローバルなキャリアのステップにたどり着いたと安堵し胸が踊りました。私の人生の大きな転機を迎えていることに、その時の私はさほど実感していませんでした。

（「国際機関の人材開発～世界で活躍するための心得～」より一部を抜粋・改編）

## 引用文献

小西尚実編『グローバル・キャリアのすすめ～プロフェッショナル講義～』関西学院大学出版会、2018。  
大江端絵・高畑由起夫『学生達は国境を越える』関西学院大学出版会、2008。

2018年3月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部



UNESCO 本部（パリ）